

日本人の自然観を見つめ直す



総合司会
渡邊あゆみ氏
NHK放送研修センター
エグゼクティブ・アナウンサー



ロバート キャンベル氏
国文学研究資料館長



高島幸次氏
大阪大学招聘教授



玉岡かおる氏
作家・大阪芸術大学教授

なぜ復活しなかったのか

渡邊 古代なにわで八十島祭が行われていたことを、どのようにお考えでしょうか。

高島 天皇の御衣に海風を当てて神霊を受け、それをお召しになることで国の統治権を得るといふ八十島祭の考えは、海外にも似たような例があります。イギリスの文化人類学者・ジェームズ フレイザー(1854~1941年)による「感染呪術」という概念で、ある人が身に着けたり触れたりしたものは、その人から離れても何かが宿っているという考えです。好きな人が持っていたハンカチを自分が持っている、その人がそばにいるような感じがするというものですね。八十島祭にそうした感染呪術の概念があるとすれば、それは現代にも通じる感覚だと思います。

玉岡 八十島と聞いて思い浮べるのは、百人一首の参議・小野篁(おののたかむら)の「わたのはら 八十島かけて漕ぎ出でぬと 人には告げよ海人のつり舟」です。八十島とはたくさんの島々のことで、関西人であれば瀬戸内海を思い浮べるでしょう。そこでは海や島という自然に意識が向きがちですが、人

の存在も忘れてはなりません。古代の為政者が瀬戸内海から得たいものを想像すれば、船で島々を駆け巡る勢力が考えられるでしょう。天皇も、秋津島(あきつしま=大和の古称)の島神様の力を得ることと併せ、水軍のような力強い人々を支配下に置きたいと思われたのではないかと想像します。

高島 おっしゃる通りだと思います。歴史の中に「海民」という言葉があります。天皇家や平氏は海民です。

玉岡 私が小説にも描いた孝謙(称徳)天皇の御代には遣唐使が出航した回数も多く、たびたび難波の津に使者が派遣されています。しかし、即位の翌年に難波の津へ遣わされた使者となると、遣唐使がらみではない。何か特別な目的のためだった。つまり八十島祭のためだったとわかりました。

キャンベル 光格天皇時代の天明8(1788)年に京都で大火があり、それをきっかけに平安時代の様式で内裏を修復しようという動きがありました。部屋割りや調度類、神殿、和歌や音楽にいたるまで、古い文献を考証して再現したのです。このとき八十島祭についても考証されました。

『八十島祭絵詞』第1巻

<鳥羽伏見を通り淀の津へ>

行列は都大路を進み、鳥羽伏見を通って淀の津へ向かいます。典侍は「唐庇車(からびさしのくるま)」と呼ばれる最上格の牛車に乗りました。





高島 そうなんですか。八十島祭は1224年を最後に現在まで途絶えたまま、人々に忘れられていたのかと思っていました。光格天皇の時代に一度注目されていたのですね。

キャンベル 実際に儀式が再現されたかどうかまでは分かりませんが、非常に興味深いことですね。

玉岡 壬申の乱のように力で皇位を奪い合う時代では、どんなに造作をかけてでも、自分が新しい天皇であることを広く知らしめる必要があったでしょう。そういう強い動機がなければ、八十島祭を復活させることはできなかったのだと思います。

高島 八十島祭を行うために、京都から100人以上の煌びやかな行列を作って難波の津までやってきました。これは大嘗祭では出せない大きな宣伝力となります。

玉岡 出船・入船がひしめく難波の津で大勢で何かをしていると、その情報はたちまち瀬戸内を経由して各地へ伝播していきます。だから難波でやることに意味があったのだと思います。

八十島タイタニック説

キャンベル 私は、2025年大阪・関西万博のシニアアドバイザーとして、夢洲を視察しました。その埋立地に立って、大阪は海のまちだと実感するとともに、吹き通る風がいろんなものを浄化しているような感じさえ持しました。西を向くと神戸やその先が見渡せます。中世の難波の津からもそうした景色が見渡せたでしょう。そう考えると、万博で大阪の歴史・文化の力をアピールしなければならぬと強く感じましたし、絶好の機会だと思いました。

高島 夢洲や咲州など数多くの埋立地がある大阪湾は、現代の八十島という見方もできますね。キャンベル先生、万博会場に八十島を記念するモニュメントを作ってくださいよ。

キャンベル 「いのち輝く」というテーマには、祈りや鎮魂という概念も含まれます。それを象徴するのが造形物なのか精神文化なのか…。

玉岡 私は今、北前船をテーマにした小説を書いている関係で、船で安治川、木津川の河口から大阪湾に出たことがあります。そこで咲州、夢洲の風景を見て八十島を実感しました。昔は四天王寺あたりまで海が迫っており、そこから西に沈む美しい夕陽を眺めることができました。今は地形が変わってしまい、ビルが建ち並んでいますので、大阪に住んでいる人た

ちは、ここが海だったとイメージしにくいのです。でも、河口に立って海に沈んでいく夕陽を見れば、大阪はまさに西に向かった海のまちだと実感できると思います。残念なのは、そうした立地を想像できるランドマークがないことです。

高島 天皇が難波宮におられたときは、典侍ではなくご自身が目の前の海に行き、大海原の風を受ける八十島祭が行えたでしょう。天皇が岬の突端で両手を広げて風を受けている姿は、映画『タイタニック』の名シーンを彷彿させます。私はこれを「八十島タイタニック説」と呼んでいます。映画では女性が手を広げて、男性が後ろで支えています。八十島祭の時代は幼帝が即位することが多く、典侍となる女官に支えられていたかもしれません。万博を機に、夢洲や咲州にカップルで大海原の息吹を受けて命を感じられる場所をつくれればどうでしょうか。私は、古代は専門外なので、無責任で気楽な提案ですが。

渡邊 奈良時代には大阪湾から四天王寺がよく見え、その威容を示すことで国家権力の整った国であることを内外にアピールしたそうです。そう考えると、大阪は、二度目の万博が開催される場所として意味があると思います。残念なのは、天皇がおられる東京から遠いことです。京都の人は今でも、天皇が御所に戻ってこられる日が来ると信じておられるそうですね。

玉岡 冷泉家などでは、「天皇はちょっと東京へ行っておられるだけで、150年間お帰りを待っています」とおっしゃっています。

女性が祭儀をする意味

キャンベル 京都から大阪まで大勢の煌びやかな人たちが長い道のりを行進し、人々の目に触れたことは、玉岡さんがお

『八十島祭絵詞』第1巻

<鳥羽伏見を通り淀の津へ>

行列は、典侍や宮主をはじめ、貴族、官吏、従者で構成されました。貴族や官吏は馬に乗って移動、武士たちは弓矢で武装しています。



どこまでが「西」なのか

高島 岡田先生は先ほどの基調講演の中で、東向きの大嘗祭、西向き八十島祭ということ強調されていました。かつての宮中祭祀にそういう西と東の使い分けがあったとしたら、現在、「東」だけしか行われていないことが気になります。

玉岡 西と東のセットで行うことに意味があると思います。高島先生が海民のお話をされましたが、瀬戸内海の先には四国や九州や対馬といった大きな島がありますから、そこに住む人々を納得させるにも、やはり国生み神話に則って「西」で行う必要があったのではないかと思います。国民は天照大御神とイザナギノミコト、イザナミノミコトに守られているということで納得するでしょうから。

キャンベル どのあたりまでを「西」と呼ぶのでしょうか。瀬戸内海を西に行けば豊前の国、日向の国があり、その先には神話に出てくる高天原(天界の国)があります。鎮西は九州であったわけですが、どのあたりが西の境界だと思われませんか。

玉岡 関西人の祖先は、「西」という概念に境界をつくっていません。遣唐使を出した孝謙(称徳)天皇は、おそらく唐土の国(中国)の先を大陸というものも含めて西域と考えていたと思います。それが鎌倉期になると浄土思想が生まれ、人々は、浄土すなわち遥か西の彼方は無限であるという感覚を持っていたのではないのでしょうか。太陽が上ってくるころは見えているが、沈む先は無限であるという感覚ですね。

高島 そう考えると、御衣に西からの海風を受けたということと整合します。風の起源はどこだとは言えませんからね。

玉岡 西から運ばれる無限のパワーをいただくということでしょう。

渡邊 関西の人の地理感覚は、他の地域の人とは違うように思います。神戸の人は、北に山、南に海という方向感覚を持っているそうです。これは関東平野に住む人とは異なる感覚です。そう考えると、難波の津から西に向かい瀬戸内海を介して世界につながるというのは、関西人の感覚なのだと思います。

高島 その感覚は、八十島祭が行われていた時代はもっとはっきりしていたでしょう。上町台地のすぐ西の際には浜辺があって、波風が押し寄せ、海風が吹いてくる。当時の人は、現代人以上に西や海に不思議なものを感じていたのだと思います。



しゃるように、単なる神事としてではなく、天皇の威信を示す目的もあったと思います。高島先生が指摘されたように、9世紀以前は都と祭場が近かったので、幼帝自らが八十島祭に臨んだとも考えられるでしょう。あるいは、幼い天皇に代わって、乳母(めのと)が祭祀の作法を行ったかもしれません。いずれにせよ、女官の典侍が箱を開けて海風に向かって御衣を揺らすという作法はとても美しく、能のような幽玄な趣きを感じます。

高島 しかもバックでお琴が奏でられている。なんとも風雅です。

玉岡 ここはやはり女性でなければ駄目だったと思いますね。天照大御神が天岩戸に隠れたとき、天鈿女命(あめのうずめのみこと)という女神様の踊りで窮地が救われたように、優雅で美しいものを見せて神様の気を引くという日本神話があります。難波の津から西を向いて行くということは、おのころ島(淡路島)の国生み神話、つまりイザナギノミコト、イザナミノミコトにつながる祭儀だと思います。こうした神話に基づくとすれば、天皇ご自身より、女性が優雅に御衣を振り動かすことに意味があると思います。

『八十島祭絵詞』第2巻

<渡辺の津へ上陸>

舟で淀の津を出発した行列が、渡辺の津(現在の大阪市北区天満橋あたり)へ上陸しました。



玉岡 難波の津から西を眺めると、遠くに須磨の高取山が見えて、そこで畿内が終わります。須磨は「隅っこ」が転じた地名だといわれるぐらいなので、古代人は、その辺りが「畿(みやこ)」(天皇の直轄地)の限界だと感じていたのでしょうか。

高島 難波宮の後に政治上の都は転々と移りますが、必ず難波の津に戻って八十島祭を行っていたのは、ここが「心の都」だったからでしょう。

キャンベル 江戸時代の大阪の絵を見ると、「太鼓橋、帆かけ船、松原」の3つで「住吉大社」を描いているものが多くあります。この3つだけで、難波、住吉だと分かるような場所は江戸にはありません。

玉岡 北前船の船乗りたちは、北陸、東北、江差(北海道)の神社に「住吉」を描いた絵馬を奉納しました。彼らは、住吉さんが海の神様だと信じていたからこそ、そして航海の無事を祈ったのです。住吉大神は、イザナギノミコトが黄泉の国から帰って来た際、禊ぎをしたときに生まれた三神の総称です。そう考えると、国生み神話に通じるという意味で、住吉の神に祈るというのが八十島祭の基本だと思います。

キャンベル 江差の神社にまで住吉の絵馬が奉納されているとは、とても興味深いお話ですね。

高島 現在、天王寺区にある生國魂神社(祭神は大八洲の神霊である生島大神、足島大神)は、当初は上町台地の先端に鎮座し、八十島祭に深く関わっていましたが、いつしか祭場も住吉大社(祭神は海の神である筒男神と神功皇后)に近い浜に移されます。西に海を臨むということでは共通しています。

未来を望む場所

渡邊 2025年に万博を控えている大阪の未来、あるいは日本全体から見て、八十島祭にどのような意義を見出すべきでしょうか。

玉岡 難波の津が「心の都だった」という考えは同感です。時代が変わり、西の世界が無限ではなくなっても、やはり難波の津はホームポジションだという思いです。夕陽の沈む先を見つめ、未来を考える地であらねばならないと思いますね。『続古今和歌集』に、最後の八十島祭のお遣いに立つはずだった兵部卿隆親(たかちか)の歌「みそぎせし すゑとだに見よ住吉の

神もむかしを忘れはてずば」があります。「かつてみそぎをした住吉の浜はここかと思って見ていきなさい。きっと神様も昔の儀式をお忘れではないから」という歌です。これは現代人にもいわれているような気がします。都が東京に移ってしまいましたが、心の都は未来を望む大阪だということを、誇りを持って知らなければならぬと思います。

高島 全く同感です。平城京や平安京より前に大阪に都があり、八十島祭が行われていました。だから、インスタントラーメンや回転寿司は大阪発祥だと誇るのもいいけれど、もっと古いところから大阪のアイデンティティを見直すこともできる。八十島祭の再考を機に、そういう視点を持ってほしいですね。

キャンベル 新型コロナウイルスによって、日本そして世界で大変な日常が続いています。また、分断やポピュリズムなど、何を心の拠り所とすればいいのか分からないような時代にあって、八十島祭には直球で日本人の心に訴えるものがあります。つまり、大阪は生命や生活といった本質的なことを見つめ直す格好の場所であり、八十島祭が受け継いできたことを知ることとはとても大事だと思います。

渡邊 ありがとうございました。

高島幸次氏 1949年、大阪生まれ。龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了。専門は日本近世史・天神信仰史。夙川学院短期大学教授、追手門学院大学客員教授などを経て、大阪大学招聘教授、大阪天満宮文化研究所員を兼務。2012年度大阪市民表彰(文化功労)。

玉岡おる氏 兵庫県生まれ。神戸女学院大学文学部卒。1987年『夢食い魚のブルー・グッドバイ』(新潮社)で神戸文学賞を受賞し、作家デビュー。2009年『お家さん』(新潮社)で織田作之助賞受賞。主な著書に、『姫君の賦 千姫流流』(PHP研究所)、『天平の女帝 孝謙称徳』(新潮社)など。

渡邊あゆみ氏 神奈川県生まれ。東京大学教養学部卒。1982年、NHK入局。4年目にNHKの看板番組の一つ『7時のニュース』のキャスターに抜擢。現在は『プレミアムカフェ』、『偉人たちの健康診断』、『ラジオ深夜便』などに出演。

『八十島祭絵詞』第2巻 <住吉の浜へ向かう>

渡辺の津に上陸した一行は、乗馬や牛車の装いを直した後、陸路・阿倍野道を通り住吉の浜(現在の住吉大社あたり)へ向かいました。

